

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第160回 東邦医学会例会
別タイトル	160th Regular Meeting of the Medical Society of Toho University
作成者（著者）	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2022.12.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 69(4). p.188 199.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD51310945">https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD51310945</a>

# 第160回 東邦医学会例会

令和4年6月15日(水)~17日(金)

東邦大学医学部大森臨床講堂(5号館B1階)

6月15日(水)

## A. 大学院生研究発表

### 1. 在留ブラジル人生徒及び日本人生徒におけるメンタルヘルスと異文化適応との関連についての研究

福井英理子(東邦大学医学部精神神経医学講座)

国際移住はさまざまなストレスを伴い、精神障害との関連が示されてきた。国際移民における精神障害のリスクファクターのうち、民族アイデンティティおよび帰属意識がメンタルヘルスに及ぼす影響に注目し、移住先の国にルーツを持つ日系人のメンタルヘルスを調査し日本人と比較検討した。先行研究から、若年の移民が精神科を適切に受診できていない可能性を考え、日本人高校生70名と日系ブラジル人高校生26名を対象とした。尺度を用いてアンケート調査を実施し統計解析を行ったところ、日系ブラジル人の群は精神的健康度が有意に低い結果となった。また日系ブラジル人の群の中で、民族アイデンティティが低いものは高いものより精神的健康度が低く、両群に有意差がみられた。国際移民にとって、民族アイデンティティを確立することは精神的健康度を維持するために有益であるといえ、また問題を抱えた際に援助希求をできる場所や制度を構築することが求められる。

### 2. 妊娠中の女性のメンタルヘルスと表情認知機能の関連

田久保陽司(東邦大学医学部精神神経医学講座,  
東邦大学大学院社会環境医療系精神神経医学専攻,  
済生会横浜市東部病院精神科)

辻野尚久, 相川祐里, 吹谷和代(済生会横浜市東部病院  
精神科)

岩井桃子, 内野敬, 片桐直之, 根本隆洋  
(東邦大学医学部精神神経医学講座)

伊藤めぐむ, 秋葉靖雄(済生会横浜市東部病院産婦人科)  
水野雅文(東京都立松沢病院)

済生会横浜市東部病院産婦人科で出産予定の72名の妊婦を対象として、妊娠中期に自記式評価尺度と表情認知機能検査を施行し、重回帰分析によって統計解析を行った。子どもの非親和表情への感受性( $\beta: .365, p=0.001$ )と初産婦であること( $\beta: -.263, p=0.016$ )は、妊娠中の抑うつ傾向と有意な関連が認められた。また、子どもの非親和表情への感受性( $\beta: .234, p=0.048$ )は、ボンディング不全と有意な関連が認められた。一方、大人の表情を対象とした表情認知機能および全般的社会認知機能は、抑うつ傾向やボンディング不全と関連しておらず、社会認知機能の中でも子どもの表情の認知バイアスが、抑うつ傾向やボンディング不全に関連していると示唆された。子どもの表情の認知バイアスを測定することは、育児困難やメンタルヘルス不調を抱える母親の早期発見に有用である可能性が考えられた。

### 3. 体幹部定位放射線療法におけるゴールドマーカーの各区域気管支における固定率

今坂圭介 (東邦大学大学院医学研究科生体応答系  
呼吸器内科学, 済生会横浜市東部病院呼吸器内科)  
磯部和順, 岸 一馬 (東邦大学医療センター大森病院  
呼吸器センター内科)  
濱中伸介 (済生会横浜市東部病院呼吸器内科)

【背景・目的】呼吸性移動を伴う肺腫瘍に対する定位放射線療法ではゴールドマーカー (GM) などの基準マーカーを要するが, 経気管支的に留置された GM はしばしば脱落し, 治療遅延に繋がる。本研究では, 各区域気管支における GM の固定率, 留置から治療開始までの期間等を明らかにすることを目的とした。【方法】済生会横浜市東部病院において, 2011 年 11 月から 2020 年 11 月までに 235 人の患者に 259 回の手技で留置された 791 の GM につき, 時間経過と固定率を評価し, 区域気管支ごとに比較した。【結果】GM の 28.8% が留置から 10 日以内に脱落していた。両側肺において, GM 固定率は上葉で有意に低かった (右:  $p < 0.01$ , 左:  $p = 0.05$ )。左肺上葉上区域における GM 固定率は  $B^{1+2}$  で  $B^3$  より有意に低かった ( $p = 0.0181$ )。また, GM 再留置例では, 放射線療法開始までの期間が有意に延長していた ( $p < 0.01$ )。【結論】GM は腫瘍近傍への留置が基本だが, これら固定率が低い気管支への留置は, 可能であれば避けるべきである。

### 4. 細胞診検体を対象とした AI による肺癌の遺伝子変異予測モデルの構築

石井脩平, 三上哲夫 (生体応答系病理学)

【背景】病理分野における人工知能 (artificial intelligence: AI) の発展は, デジタルスライドスキャナの普及と機械学習における一般手法である深層学習によって飛躍的に向上している。組織標本を対象とした機械学習では, 腫瘍の組織型や遺伝子情報の予測モデルを構築したという報告がなされているが, 細胞診標本を対象とした同様の報告は少なく, 遺伝子情報を予測するモデル構築に関しては報告がない。そこで, 細胞診標本を用いた場合でも遺伝子変異予測モデルの構築が可能か検討した。【方法】2010-2021 年の期間にがん研有明病院で採取された 145 件の細胞診検体を対象として AI による遺伝子変異 (EGFR, KRAS, ALK) 予測モデルの構築を行い, その精度を検証した。また, 遺伝子変異を推定するうえで, 構築したモデルが根拠とした細胞学的特徴について考察した。【結果】EGFR 変異は高い精度で予測可能であった。各遺伝子変異の推定において重要視された細胞像の大半は既報告の細胞所見と類似し, 加えて新たな知見も得られた。

### 5. バルーンガイディングカテーテルの支持性能, 誘導性能に関する比較実験

松本 崇 (高次機能制御系脳神経外科)  
竹内昌孝, 傳 和真, 清水 有, 鷗山 淳 (西湘病院)  
岩淵 聡 (東邦大学医療センター大橋病院脳神経外科)

【緒言】機械的血栓回収療法において, ガイディングカテーテルの滑落や誘導困難が治療時間の律速段階となり得る。ガイディングカテーテルの誘導性能, 支持性能について比較実験を行った報告はない。3 種類のバルーンガイディングカテーテルについて比較実験を行い評価した。【方法】人工血管モデルにカテーテルを押し込む実験装置を作成した。支持性能についてはガイディングカテーテルを滑落させる実験を行い, 滑落距離, 滑落させる際に生じた抵抗値を評価項目とした。誘導性能についてはガイディングカテーテルを大動脈弓から内頸動脈に誘導する実験を行い, 内頸動脈内への到達距離, 挿入時に生じた最大抵抗値, インナーカテーテルの滑落距離を評価項目とした。【結果】支持性能は, Optimo が優れ, 誘導性能は Bronchor と Flowgate が優れていた。【考察・結語】誘導困難症例には Bronchor や Flowgate が, 高い支持性が求められる症例には, Optimo が適している。

## B. 分科会報告

### 6. 透析と高齢者脳疾患

○榊原隆次, 尾形 剛, 澤井 撰 (佐倉病院内科学講座  
脳神経内科分野)  
飯村綾子 (佐倉病院認知症サポートチーム)  
桂川修一 (佐倉病院メンタルヘルスクリニック)  
長尾孝晃, 根本匡章 (佐倉病院脳神経外科)  
大橋 靖, 山崎恵介 (佐倉病院腎臓内科学講座)

高齢透析 (HD) 患者のせん妄の背景疾患は十分に明らかにされていない。本検討の結果 HD ( $n = 133$ ) の平均年齢 67 歳, 37.6% が認知症サポートチーム (DST) 受診 (年齢  $\geq 65$  歳 [高齢] 62.4%,  $p < 0.05$ ), このうち誤嚥性肺炎 30%, 身体抑制 23.3%, 転倒関連手術 16%, 背景疾患は白質型多発性脳梗塞 (WMD) + アルツハイマー病 (AD) (80%) が多く, 一部レヴィー小体型認知症もみられた。高齢 HD 患者は身体抑制を要したり, 脳由来の合併症を有することが少なくない。高齢者ケアの観点から, HD 患者の加齢脳疾患に留意する必要があると思われた。

## C. 柴田洋子奨学助成金・柳瀬武司奨学基金受賞講演

### 7. The influences of gender and aging on optic nerve head microcirculation in healthy adults

小林達彦, 松本 直, 堀 裕一 (眼科学講座)  
柴 友明 (国際医療福祉大学成田病院眼科学講座)  
木下綾子 (JCHO 東京蒲田医療センター)

【目的】性差, 加齢はレーザースペックルフローグラフィで求める視神経乳頭 (ONH) 領域の平均 mean blur rate (average MBR) と負の相関を示すことが報告されている。今回我々は性差, 加齢が MBR へ与える影響の差異を多数健常人で検討した。【対象・方法】JCHO 東京蒲田医療センター健康管理センターを受診した 908 例 (男性 701 例 50.0±9.1 歳, 女性 207 例 49.8±9.5 歳,  $p=0.76$ ) である。右眼の ONH 全領域を測定し, 4 秒間における average MBR, 脈波のピークにあたる最大値 (Max MBR), 定常流である最小値 (Min MBR) を解析した。性差, 加齢が寄与する MBR パラメータを検討した。【結果】単変量解析で性差と Max MBR (男性=1, 女性=0,  $r=-0.31$ ,  $p<0.0001$ ), 加齢と Min MBR ( $r=-0.20$ ,  $p<0.0001$ ) が最も強い相関を認めた。多変量解析で Max MBR の独立した寄与因子として性差 ( $\beta=-0.15$ ), 脈圧 ( $\beta=0.13$ ), 眼灌流圧 ( $\beta=-0.14$ ), 屈折値 ( $\beta=0.08$ ), 赤血球量 ( $\beta=-0.17$ ) が, Min MBR へは年齢 ( $\beta=-0.22$ ), 心拍数 ( $\beta=0.21$ ), 赤血球量 ( $\beta=0.14$ ) が選択された。【結論】男性, 加齢の average MBR への負の相関は, 性差は Max MBR, 加齢は Min MBR 低下を介した現象であることが示された。

### 8. 機能性めまいにおける心理的要因を介した病態解明の研究

橋本和明, 端詰勝敬 (心身医学講座)

機能性めまいは器質的異常だけでは十分に病状を説明できず, 心理的要因が関与する心身症の病態であるが, メカニズムは不明である。本研究ではまず, 心因性めまい 33 例を対象に心身症と関連がある身体感覚増幅の影響を検証するため, めまいを Vertigo Symptom Scale-short (VSS-sf), 身体感覚増幅を Somatosensory Amplification Scale (SSAS), 不安抑うつを Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS) で評価した。線形重回帰分析の結果, VSS-sf のスコアは SSAS の高さや年齢の低さと有意な関連を認め, 心因性めまいにおける身体感覚増幅の関与が示唆された。次に, Persistent Postural-Perceptual Dizziness (PPPD) 50 例を対象に重症心身症と関連する中枢性感作の影響を検証するため, めまいを Dizziness Handicap Inventory

(DHI), 中枢性感作を Central Sensitization Inventory (CSI) で評価し, その他関連因子を含めた解析を実施した。PPPD では中枢性感作症候群に該当する症例群において有意に臨床症状が強く, 線形重回帰分析の結果から, CSI は DHI の正の関連因子であった。以上より, 機能性めまいでは身体感覚増幅や中枢性感作などのメカニズムが病状に関与している可能性が示唆された。

## D. 研修医発表

### 9. 発症早期から治療介入を要した成人 Still 病の一例

古山ゆりあ (大森初期研修医)

症例は 69 歳女性。発熱, 全身倦怠感, 咽頭痛を主訴に来院した。サーモンピンク疹, 好中球主体の白血球増多, 肝酵素上昇, フェリチン高値を認め, 感染症・悪性腫瘍・その他の自己免疫疾患は否定的であることから成人 Still 病が疑われた。心膜炎・心筋炎を合併しており, 第 4 病日に心不全の増悪を認めたため除外診断の結果を待たず治療を開始した。経過中に心膜炎・心筋炎の増悪を認めたが, ステロイド療法, 免疫抑制療法で奏功が得られた。成人 Still 病は早期診断が困難であることが多く, 診断の遅れが問題となることがある。予後は比較的良好であることが多いが, 合併症のある症例は予後不良であることが報告されており, 重症例では早期の治療介入が必要であると考えられる。今回, 発症早期から治療介入を要した症例を経験したため, 文献的考察を加えて報告する。

## E. プロジェクト研究報告

### 10. 未熟児網膜症治療後の眼球構造と視機能についての評価

松村沙衣子, 川上桃子, 片山雄治, 富田匡彦, 糸川貴之  
岡島行伸, 松本 直, 堀 裕一 (東邦大学医療センター  
大森病院眼科)

【目的】前眼部光干渉断層計 (OCT) を用いて未熟児網膜症 (ROP) に対するレーザー (LPC) 治療既往眼の構造的特徴と屈折異常との関連性を検討した。【方法】対象は当院で経過観察されていた ROP 発症既往がある小児の 26 例 49 眼 [年齢 (平均) 7.7 歳, 男児 11 例]。オートレフラクトメータを用いた調節麻痺下屈折度数, 前眼部 OCT, 光学式眼軸長測定器を測定し, 治療群と未治療群の 2 群間比較を行った。多変量解析にて前房容積の危険因子を検討した。また前眼部因子と屈折異常の相関を検討した。【結果】治療

群と未治療群の2群間比較において、角膜曲率 ( $p < 0.05$ )、眼軸長 ( $p < 0.05$ )、前房容積 (ACV) ( $p < 0.001$ )、前房角度 (ACA) ( $p < 0.05$ )、隅角開放距離 (AOD) ( $p < 0.001$ )、線維柱帯虹彩面積 (TISA) ( $p < 0.001$ )、水晶体厚 (LT) ( $p < 0.01$ ) に有意差が認められた。多変量解析の結果、LPC 照射数と Zone 重症度が前房容積の独立した危険因子であった ( $p < 0.05$ )。ACV ( $p < 0.01$ )、ACA ( $p = 0.01$ )、AOD ( $p < 0.01$ )、TISA ( $p < 0.001$ )、LT ( $p < 0.01$ ) は円柱度数と有意な相関を認めた。【結論】ROP に対する LPC 治療群の眼球構造変化として、急峻な角膜曲率、短眼軸長、厚い水晶体、小さい前房容積が認められた。LPC による眼球構造変化は円柱度数に影響を与える可能性が示唆された。

## G. 大学院生研究発表

### 11. 小児期に発症した原発性硬化性胆管炎の予後因子

梅津守一郎, 乾あやの (済生会横浜市東部病院  
小児肝臓消化器科)

【目的】原発性硬化性胆管炎 (PSC) には有効性を示す内科的治療は存在せず、長期予後は不良な疾患である。本邦において小児期発症 PSC 患者の長期予後は不明である。【方法】当科で診断した PSC 患者 39 例 (男/女 = 22/17, 診断時年齢: 中央値 9 歳 [3-20], 観察期間: 中央値 5 年 [1-20]) を対象とし、後方視的検討を行った。【成績】PSC 39 例中、肝関連合併症 16 例に認め、肝移植施行例は 9 例であった。肝関連合併症なし生存に関する多変量解析の結果、自己免疫性肝炎合併が肝関連合併症発症に独立して影響する危険因子として同定された。【考察と結語】小児 PSC 研究は過去欧米中心に行われ、自己免疫性肝炎合併は予後不良とする報告が乏しい。一方で、本邦の小児 PSC 患者では予後悪化予測因子として自己免疫性肝炎が同定され、異なる結果であった。今後この差異について検討する必要がある。

### 12. 急性腹部感染症における自動多項目同時遺伝子システム FilmArray® の有用性に関する検討

柿崎奈々子, 浅井浩司, 渡邊 学, 鯨岡 学, 森山穂高  
渡邊隆太郎, 斉田芳久 (東邦大学医療センター  
大橋病院外科)  
黒田 誠 (国立感染症研究所  
病原体ゲノム解析研究センター)

穿孔性腹膜炎や腹腔内膿瘍などの急性腹部感染症は致死的となり得るため、適切な抗菌薬の選択が必要となる。しかし現在、耐性菌の蔓延により抗菌薬の選択は極めて困難

な状況にある。今回、われわれは穿孔性腹膜炎・腹腔内膿瘍 11 症例を対象に、腹腔内から得られた検体を Bio Fire 社の FilmArray®, Blood Culture Identification panel を用いて評価し、また同一検体に対しメタゲノム解析を用いた定量的評価を加えその有用性を検証した。これらの検体から培養同定された病原体のうち、FilmArray® により検出可能であったのは 90.5% であった。本邦において、FilmArray® を用いた腹水・膿汁の直接的な評価はこれまで報告されていない。本研究では少数例の解析であるが、FilmArray® は次世代の起因菌同定システムとなり得る可能性が示唆された。

### 13. 副鼻腔炎手術症例における吸入抗原感作の検討

井上なつき (高次機能制御系耳鼻咽喉科学・大橋病院)

【背景・目的】ダニや真菌などの吸入抗原の感作は、気管支喘息の発症や重症化に関与する。一方、Type2 炎症性の副鼻腔炎は再発率が高く気管支喘息の合併が多いとされるが、副鼻腔炎患者における吸入抗原の感作状況を検討した報告は少ない。そのため、慢性副鼻腔炎患者の吸入抗原の陽性率について検討し、気管支喘息の合併や術後再発の有無により層別化して統計学的な解析を行った。【対象・方法】過去 6 年間に当院で慢性副鼻腔炎に対して手術を行った 453 例を対象とし、後方視的観察研究を行った。吸入抗原は、ダニ、スギ、ヒノキ、カモガヤ、ブタクサ、シラカンバ、アスペルギルス、カンジダ、アルテルナリア、クラドスポリウム、イヌ、ネコについて検討した。【結果】その結果、気管支喘息合併患者ではダニ、ネコ、アスペルギルス、カンジダ、クラドスポリウムの陽性率が高く、特に術後再発をきたした患者ではシラカンバ、ネコの陽性率が高かった。また、ネコの特異的 IgE 抗体の陽性群では陰性群と比較して、CT スコアやポリープスコアが高かったことから、ネコ抗原の感作が慢性副鼻腔炎病態の重症化に関与している可能性が示唆された。

### 14. 解剖学的人工肩関節全置換術の治療成績—グレンオイドコンポーネントの X 線透過性の評価—

阪元美里, 石井秀明, 眞宅崇徳, 吉澤 秀, 前田隆浩  
武者芳朗, 池上博泰 (東邦大学医学部  
整形外科講座 (大橋))

腱板機能が保たれている変形性肩関節症に対して解剖学的人工肩関節全置換術 (以下、ATSA) が行われている。グレンオイドコンポーネントの loosening は術後成績を大きく左右する。ATSA を行い術後 5 年以上経過した症例の術後成績と X 線透過性を検討した。2006 年から 2015 年に ATSA を行った 21 肩を対象とした。最終経過観察時の X

線とCTを用いてX線透過性を検討し、合併症と再置換の有無を評価した。手術時年齢の中央値68.4(範囲:45~86)歳、経過観察期間の中央値119(範囲:73~178)ヶ月、症例の内訳は変形性肩関節症14肩、関節リウマチ7肩であった。合併症はloosening 2肩、上腕骨ステムの穿破1肩、上腕骨通頸骨折1肩を認め、神経学的合併症や感染はなかった。再置換例はなかった。X線透過性は上方のペグの方が高く、下方よりも先行する傾向にあった。ATSAの術後成績は良好であり再置換例はなかった。X線透過性の評価にはCTが有用であった。上方のペグのX線透過性はlooseningの初期変化を表している可能性があった。

### 15. Wilson病患者の自立生活状態に関連する診断時の因子の検討

雨宮歩実(生体応答系小児科学)

【背景】Wilson病は治療可能な遺伝病の一つであるが、診断時の因子と自立生活状態に関連する報告は乏しい。【目的】Wilson病患者の生活状態をより良いものとする事を目的として、診断時の因子の検討を行った。【対象】Wilson病全国調査(2016年)と大橋病院小児科に通院中の患者、合計308名を対象とした。【方法】曝露因子として性別、診断時年齢、追跡期間、初発時の症状・所見を検討した。自立生活状態との関連を修正ポアソン回帰分析で検討した。【結果】関連(調整済みリスク比及び95%信頼区間)が示唆された因子は神経症状(重症:3.63, 2.28-5.77, 軽症:3.20, 1.96-5.23)や脾腫(2.57, 1.26-5.24)などであった。【考察】診断時に神経症状や脾腫を有する場合は、自立生活状態が不良となるリスクが高いことを念頭におき診療にあたる必要があると考えられた。

### 16. The effect of organized screening introduction on behavioral changes of receiving mammography examination : A cross-sectional study in Serbia

谷垣佳奈子(社会環境医療系医療政策経営科学専攻)  
畠山洋輔, 松本邦愛, 大西 遼, 瀬戸加奈子, 長谷川友紀  
(社会医学講座)

セルビアでは、2012年から乳がんの対策型検診が導入された。本研究は、乳がんの対策型検診の導入と検査受診行動の関連を明らかにすることを目的とした。JICA技術協力プロジェクトによる調査票調査の二次データ解析を実施した。対象は50~69歳の女性、サンプリング方法は層化抽出、サンプルサイズは1200例とした。回答者の行動変容ステージを1)無関心期、2)関心期、3)実行期、4)維持期に分類した。回答者の居住地から、対策型検診導入群と未導入群を区別し、先行研究で受診行動との関連が指摘され

ていた社会的要因(年齢、教育水準、婚姻状況、経済水準)を調整して、対策型検診の導入と行動変容ステージを両群で比較した。回答者は導入群622例、未導入群582例であった。関心期、実行期、維持期にある人の割合は、社会的要因を調整しても、未導入群に比し導入群で高かった。対策型検診の導入が検査受診に向けた行動変容を促進させる可能性が示唆された。

## H. 大森病院 CPC

### 17. 悪性リンパ腫の経過中に多発肝腫瘍を認めた1例

臨床提示:長瀬大輔(血液・腫瘍科)

病理提示:黒瀬泰子(病理診断科)

司会:石原 晋(血液・腫瘍科)

死亡7カ月前から右臀部痛と腫瘍を触知し、死亡5カ月前の臀部の針生検でびまん性大細胞型B細胞リンパ腫(Diffuse large B-cell lymphoma; DLBCL)の診断となった81歳の男性。右下腿のしびれと腫瘍崩壊症候群を認め、他院にてR-CHOP療法を2コース開始し、右臀部の腫瘍の縮小と右下肢のしびれの改善があった。当院に転院となり、R-CHOP療法6コース投与中の死亡1カ月前から食思不振を認めた。死亡2週間前から呼吸困難感・体動困難があり、CTで肝臓に多発する腫瘍性病変を認めた。血液検査でCEA, CA19-9の上昇もあり、大腸癌の肝転移を鑑別に挙げ、下部消化管内視鏡検査も検討されたが、死亡1週間前から胸水貯留に伴う酸素化不良があり、積極的な治療を行わないとの方針となり、永眠された。剖検時は下行結腸に50×35mm大の2型腫瘍を認め、横行結腸を主体として頭側の腸管は著明に拡張していた。組織学的には、中分化相当の管状腺癌を認めた。腫瘍は固有筋層を超えて漿膜下層への浸潤を認めるが、漿膜面への露出はない。著明な静脈侵襲とリンパ管侵襲を認め、壁内の神経周囲侵襲を認めた。結腸壁在・頸部・甲状腺周囲・気管周囲・肺門・傍大動脈のリンパ節への転移を認めた。肺と肝臓に遠隔転移を認めた。また、DLBCLの治療中であり、肉眼的に観察できる範囲のリンパ節を標本化した。異型リンパ球の浸潤は明らかでない。しかし、脊髄には大型の異型リンパ球の軟膜下播種を認めた。免疫組織化学的には、異型リンパ球はCD20陽性、CD79α陽性、bcl-2陽性、CD10陽性、bcl-6陰性、MUM-1陰性、Ki-67判定不能。以上はDLBCLに相当する所見である。以上から下行結腸癌による解除することのできない器質性腸閉塞とそれに伴う低栄養状態であったと考える。低栄養による全身状態の悪化と共に、両側の大量の胸水で一回換気量は減少していた。一回換気量の減少で低酸素血症となり呼吸不全が進行したことで死亡

に至ったと考える。また、大腸癌の肺転移はあるものの、酸化不良には寄与しない。歩行障害および体動困難はDLBCLの脊髄における髄膜がん症による伝導路の系統的脱髄による症状であることが示唆される。しかし、全身状態不良であり、るい瘦による筋力低下も関与していたと考えられる。本会では本例の臨床経過を確認した後に、大腸癌やDLBCLの浸潤を中心とした剖検結果が開示された。その上で本症例のDLBCLの悪性度や浸潤範囲についての討論を行った。

6月16日(木)

## K. 柴田洋子奨学助成金・柳瀬武司奨学基金受賞講演

### 18. 異所性脂肪蓄積と組織特異的インスリン感受性に着目したNAFLD合併早期2型糖尿病の治療戦略

蛭間重典, 鳴山文華, 瀧上彩子, 弘世貴久 (東邦大学内科学講座糖尿病代謝内分泌学分野)  
 和久井紀貴 (東邦大学内科学講座消化器内科学分野)  
 白神伸之, 堀 正明 (東邦大学放射線医学講座)  
 田村好史, 綿田裕孝 (順天堂大学大学院医学研究科代謝内分泌内科学講座)  
 熊代尚記 (金沢医科大学糖尿病・内分泌内科学)

NAFLDを合併した2型糖尿病患者44名を、エンパグリフロジン (Empa) 10 mg/dayまたはシタグリプチン (Sita) 100 mg/dayを追加投与する2群に無作為割付を行い、12週間介入した。患者背景は糖尿病の平均罹病期間3.7年、平均HbA1c 7.2%、平均肝細胞内脂質 (IHL) 20.9%であった。Empa群はSita群と比較してIHLが有意に減少した ( $-5.1 \pm 6.2$  vs  $-1.6 \pm 3.7\%$ , Empa vs Sita,  $p < 0.05$ )。しかし、肝・筋・脂肪のインスリン感受性には群間差を認めず、HbA1cも同様に低下した。単回帰分析ではIHLの変化に各インスリン感受性の変化が寄与することが示唆されたが、重回帰分析では有意でなかった。注意すべきことに、Empa群ではSita群より体重が有意に減少したが ( $-1.8 \pm 2.4$  vs  $-0.2 \pm 2.4$  kg,  $p < 0.05$ )、全身筋肉量も減少し ( $-0.8 \pm 1.8$  vs  $0.7 \pm 1.0$  kg,  $p < 0.01$ )、多くの有害事象が観察された (43.5% vs 9.5%,  $p < 0.05$ )。NAFLD合併2型糖尿病患者には、早期からのSGLT2阻害薬の投与が好ましいと考えられる一方で、フレイルのリスクが懸念される患者には、DPP-4阻害薬も考慮すべきである。

## L. 研修医発表

### 19. 胸水貯留、心嚢液貯留で紹介受診となった高齢女性がSLEと診断された一例

正木那実 (東邦大学医療センター大森病院初期研修医)

乳癌の既往歴のあるADL自立した66歳女性。1ヶ月前から持続する発熱、胸痛、食欲不振があり、1週間前から体動時や深吸気時に左胸痛を自覚していた。症状が改善しないため前医を受診したところ、炎症反応高値、CT上胸水、心嚢液の貯留を認め当院を受診した。胸水穿刺、上下部消化管内視鏡検査を施行したが悪性所見や細菌感染を示唆する所見はなかった。入院後1週間の自然経過でCRP、発熱、胸水貯留、心嚢液貯留は改善した。しかし入院12日目の採血にて汎血球減少を認め、追加採血を施行したところ抗核抗体が陽性であった。漿膜炎、汎血球減少、抗核抗体陽性などからSLEが鑑別にあがったが入院後自然経過で症状改善したことや特異抗体が陰性であったことからウイルス感染症であった可能性も否定できず治療介入せず外来にて経過観察となった。SLEについて文献的考察を加えて報告する。

### 20. 黄疸を伴った悪性貧血の一例

井上直人 (大森初期研修医)  
 佐々木陽典 (総合診療・救急医学講座 (大森))

73歳男性。労作時息切れ、Hb 4.2 g/dLの精査目的で紹介受診。全身の黄染と蒼白が顕著で、MCV 127.2 fL、T-Bil 3.7 mg/dL、inD-Bil 3.5 mg/dL、LDH 2166 U/Lと大球化と溶血または無効造血が疑われた。大球性貧血の原因としてアルコール多飲、甲状腺機能低下症、糖尿病、肝機能障害は除外され、血清ビタミンB<sub>12</sub> < 50 pg/mlと著明低値であり、上部消化管内視鏡で高度な萎縮性胃炎を認めた。抗壁細胞抗体陽性かつ尿素呼気試験陰性で、糖尿病治療薬・制酸薬の服用歴もないことから、悪性貧血と診断した。赤血球4単位輸血のうえ週3回のビタミンB<sub>12</sub>筋注を2週間実施により軽快した。

## M. 研修医発表

### 21. 体重減少精査目的に受診し進行性核上性麻痺の診断に至った1例

竹原小百合 (初期研修医)

誤嚥性肺炎は高齢者のcommon diseaseの一つである。

しかしその背景には誤嚥性肺炎を引き起こす別の疾患が隠れている場合がある。そのため単に肺炎を治療するだけでなく、背景に何らかの疾患が存在する可能性を考慮して診察することが大切である。今回体重減少を主訴に受診し肺炎像を認めた78歳男性で、詳細な身体診察から進行性核上性麻痺の診断に至った一例を経験した。進行性核上性麻痺の発症頻度は低いものの、高齢化が進むにつれて有病率は増加傾向となっている。本疾患は神経細胞やグリア細胞へのリン酸化タウ蛋白の異常な蓄積により発症する疾患で、異常蛋白の蓄積分布領域の違いで様々な臨床症状を呈する。診断の補助としてMRIなどの画像検査が有用であるが、画像検査の感度は低いため陰性所見から除外診断はできない。そのため臨床症状から診断を下していく必要がある。つまり本疾患の診断には詳細な身体診察が有用である。

## 22. 亜急性の経過を辿り診断に苦慮した高齢発症の関節リウマチの一例

阿部雄一 (大森初期研修医)  
佐々木陽典 (総合診療・救急医学講座 (大森))

我々が日常的に経験する関節リウマチの多くは中年女性をピークに慢性経過の関節痛を訴えることが多い。今回、蜂窩織炎を契機に入院となり、亜急性に進行する下肢脱力やしびれの訴えから高齢発症関節リウマチ (EORA) の診断に至った症例を経験した。EORAは古典的な関節リウマチと比較して、男性の罹患率も高いと報告されており、関節破壊の進行が速く、発熱など多彩な関節外症状を呈しうる。本症例では、当初は脱力・感覚障害という主訴からGuillan-Barre症候群などの神経疾患を疑って、髄液検査や頭部MRI施行したが有意な所見を認めなかった。再度の診察で関節炎が本症例の主病態であると考え、改めて鑑別診断を検討したところ、抗CCP抗体陽性であり、最終的にEORAの診断に至った。高齢男性の亜急性発症の関節炎においては、EORAを鑑別に挙げる必要があることを痛感した症例として、文献的省察を加えて報告する。

## 23. 胃潰瘍治癒後に幽門通過障害をきたした一例

柴田航平 (東邦大学医療センター大森病院)

症例は72歳女性、主訴はめまいであった。今回の入院のおよそ一ヶ月前に胃潰瘍による幽門部通過障害に起因する嘔吐症状にて当院入院加療されていた。前回入院時には絶食補液にて加療とし食事再開後、症状の再燃がないことを確認の上退院となっていた。退院後は外来にてピロリ菌一次療法を施行したが、その後、食後の嘔吐症状が再燃した。嘔吐や食思不振が持続し、眩暈も出現したため再度当院入院となった。病歴より幽門部通過障害の再燃をまず考え、

上部消化管内視鏡検査を行った。胃内に大量の食物残渣と前回入院時に指摘された潰瘍部の癒着化を認めた。癒着化により、物理的に幽門部通過障害をきたしていると考え、狭窄部に対してバルーン拡張術を行った。その後は病状は落ち着いており、食事開始し症状の再燃がないことを確認したうえで退院となった。外来通院中にさらに2度バルーン拡張術を施行し十分な幽門径を得た。現在は内服薬投与にて症状の再燃なく経過している。

## N. プロジェクト研究報告

### 24. 肺 *Mycobacterium avium* complex 症治療導入後の病原微生物混合感染の臨床的意義の検討

卜部尚久 (医学部内科学講座呼吸器内科学分野 (大森))

【背景】肺 *Mycobacterium avium* complex (MAC) 症において治療導入後の他の病原微生物混合感染の影響は明らかにされていない。【方法】2014年11月から2018年9月に当院で治療導入した肺MAC症48例 (年齢  $69.2 \pm 10.8$  歳, 男/女 = 9/39) を対象に、治療導入後6-24ヶ月の喀痰培養でMAC以外の病原微生物を連続して2回以上検出した症例を混合感染と定義し、MAC単独群と治療効果と胸部CT画像経過を比較した。【結果】混合感染群/MAC単独群は12/36例であり、混合感染した病原微生物の最多は緑膿菌 (7例) であった。2群間で治療導入2年経過時のMAC持続排菌率 [3例 (25%) vs. 6例 (16.7%) ;  $p=0.671$ ] とCAM耐性株の割合 [1例 (8.3%) vs. 3例 (8.3%) ;  $p>0.99$ ] に差は認めなかった。治療導入時と2年経過時の胸部CT画像score (NICE score) の推移では、MAC単独群 [9 (6.8-11) vs. 4 (2-7.8) ;  $p=0.001$ ] では有意に改善を認めたが、混合感染群 [13 (10.8-14.3) vs. 17 (13-21) ;  $p=0.55$ ] では改善を認めなかった。【結論】肺MAC症において、他の病原微生物との混合感染は治療導入後の画像改善を阻害する。



## O. 大学院生研究発表

### 25. Emergence of meropenem-resistant mutants during meropenem treatment for borderline meropenem-susceptible carbapenemase-producing and non-carbapenemase-producing Enterobacteriales in the hollow-fiber infection model and genomic characterization by whole-genome sequencing

遠藤 (堤) 裕子 (生体応答系微生物・感染制御学専攻)  
青木弘太郎, 濱田将風, 加村 (中川) 晴香, 石井良和  
館田一博 (微生物・感染症学講座感染病態・治療学分野)

カルバペネム耐性菌は臨床上脅威となる耐性菌の一つであり, meropenem (MEPM) はグラム陰性菌感染症治療薬として重要な役割を果たす。一方で, 臨床的ブレイクポイント (BP) において感受性の境界域である菌株に対する MEPM の有効性や耐性機序は明らかになっていない。今回, BP の境界で MEPM に感性を示す IMP-6 型カルバペネマーゼ産生 (CPE) および CTX-M-2 型基質特異性拡張型  $\beta$ -ラクタマーゼ産生の腸内細菌目細菌 (non-CPE) における MEPM 1 g 8 時間毎投与の有効性を hollow-fiber infection model を用いて評価した。いずれの菌株も MEPM 投与開始 2 時間後に菌数が減少したものの, その後再増殖した。また, 治療中に MEPM 耐性株 (CPE: 4 mg/L, Non-CPE: 16 mg/L) が出現した。前者は *bla*<sub>IMP-6</sub> 搭載プラスミドコピー数の増加に伴う IMP-6 産生量増加, 後者は染色体上の外膜遺伝子 *ompC* の欠失と *bla*<sub>CTX-M-2</sub> の三重複による CTX-M-2 産生量増加が, それぞれ MEPM 耐性化に寄与したことが示唆された。

## P. 大学院生研究発表

### 26. 心不全入院患者における右脚ブロック (RBBB) の存在と予後予測

佐野隆英 (東邦大学大学院代謝機能制御系循環器内科学)

心電図検査における右脚ブロック (RBBB) の存在は健常者において良性的所見とされており, 経過観察とされることが多い。しかし近年, 心血管疾患を有する患者の RBBB の存在は全死亡を増加させると相次いで海外から報告されている。今回我々は, 当科に心不全で入院した患者を後ろ向きに解析し, RBBB の意義について検討した。2014 年 4 月から 2018 年 3 月の 4 年間に当院に心不全の診断で入院した患者を抽出し, 263 人の対象群と 139 人の主要心血管イ

ベント (MACE) 群に分け, 合計 402 人を評価した。左脚前・後枝ブロック合併を除いた右脚ブロック (pure RBBB) を有する患者は 32 人であり, MACE 群には対象群と比較して有意に pure RBBB が多く含まれていた。ヘモグロビン値や年齢などで調整した多変量解析においても, pure RBBB は MACE および心不全再入院を増加させた (MACE: odds ratio 2.29, 心不全再入院: odds ratio 2.38)。右脚ブロックの存在は心不全患者において予後不良因子である可能性があり, これらの患者ではより慎重な経過観察が必要である。

### 27. EAN (実験的自己免疫性神経炎) に対する siponimod の有効性の検討

内 孝文, 紺野晋吾, 木原英雄, 藤岡俊樹 (東邦大学  
大学院内科学講座高次機能制御系神経内科学,  
東邦大学医療センター大橋病院脳神経内科)

【目的】実験的自己免疫性神経炎 (EAN) に対する siponimod の効果を検討する。【方法】牛末梢神経 P2 蛋白の合成ペプチド (aa.53-78) と CFA を 7 週齢雌 Lewis ラットの足蹠に注射した。免疫後 D5 に 2 群に分け治療群 (siponimod; n=26) には siponimod 0.1 mg/kg を PBS とともに経口投与, 陽性対照群 (EAN; n=26) には PBS を経口投与とした。臨床症状の運動障害は 0 (正常) から 9 (四肢麻痺) までのスケールで評価した。この作業を連日行った。D9, 12, 15, 21, 28 に, リンパ節の sphingosine-1-phosphate family (S1pr1, S1pr5) と炎症に関わるサイトカイン (IL-10, INF- $\gamma$ ) を real-time PCR 法により測定した。馬尾神経 (CE) では, 髄鞘形成に関与する遺伝子 (*c-Jun*, *Shh* 等) を加え, 同様に測定した。組織学的には LFB 染色および C-Jun 免疫染色した神経を調べた。【結果】Siponimod 投与により運動障害度が軽減し, 回復期末梢神経内の脱髄病巣周囲の Schwann 細胞の *c-Jun* の発現が増加した。CE 内では S1pr1 の発現が増加した。【考察】Siponimod は Th1 系のリンパ球の遊走を抑制し臨床症状を軽度にした。【結論】Siponimod は末梢神経炎を抑制する可能性がある。

6月17日(金)

## Q. 大学院生研究発表

## 28. 涙液および角膜上皮と硫酸イオンの関係性について

齋藤智彦 (高次機能制御系・眼科学)

指導: 堀 裕一 (眼科学講座)

涙液中の電解質は様々な役割があることが知られているが、陰イオンについては、含有量が少ないため、研究が進んでいなかった。我々は健常人の涙液中陰イオンの測定を行い、涙液中の網羅的な陰イオン解析に成功した。ただし、涙液中の多くの成分は血漿由来であることが知られているが、陰イオンについては不明であった。そこで今回、安定した涙液採取が可能である健康なビーグル犬を用いて、血漿と涙液の陰イオン濃度の比較検討を行った。その結果、血漿と比較して涙液中で硫酸イオンが有意に低濃度であることが明らかになったため、硫酸基と角膜上皮の関係について検討するため、硫酸基を遊離させるサルファターゼを混和した際の角膜上皮バリア機能と感染に対する影響について検討を行った。培養角膜上皮細胞の培養液中にサルファターゼを混和した際、角膜のバリア機能は有意に低下した一方、黄色ブドウ球菌の接着および取り込みを有意に抑制する結果が得られた。

## 29. 潰瘍性大腸炎患者における ustekinumab の有効性および安全性の検討

木村道明, 清水桃子, 白井萌子, 坂口吉朗, 小林 楓  
射矢れい, 関 駿介, 内藤大輔, 西宮哲生, 大内祐香  
柴本麻衣, 岩下裕明, 宮村美幸, 菊池秀昌, 山田哲弘  
中村健太郎, 松岡克善 (東邦大学医療センター佐倉病院  
消化器内科)

背景: Ustekinumab は大規模臨床試験によって潰瘍性大腸炎に対する有効性, 安全性は報告されているが, 実臨床での有効性, 安全性に関する報告はまだ少ない。目的: 当院における ustekinumab で治療した難治性潰瘍性大腸炎患者について, その有効性, 安全性を検討した。方法: 2022年2月1日までに当院で ustekinumab にて初回の寛解導入治療を受けた潰瘍性大腸炎患者を対象に8週目および16週目の臨床寛解率, ステロイドフリー臨床寛解率, 観察期間中の advanced therapy/手術への非以降率および重篤な副作用について検討した。結果: Ustekinumab の難治性潰瘍性大腸炎患者における16週目のステロイドフリー臨床寛解率は33.3%であった。投与1年目の治療継続率は7割程度であった。Ustekinumab の投与による重篤な副作用は認

めなかった。結語: Ustekinumab は実臨床においても潰瘍性大腸炎に対して有効で安全な治療である。

## R. 研修医発表

## 30. 治療抵抗性のハイリスク高齢者心房細動の一例

小山 真 (研修医2年目)

症例は80歳代の男性。下肢浮腫を主訴にうっ血性心不全の診断で入院となった。心不全の病因は虚血性心疾患および持続性心房細動と考えられた。心不全は安静, 酸素投与および利尿薬の使用で比較的速やかに代償化された。虚血性心疾患は, 前下行枝にびまん性の狭窄病変を有するも血行再建の適応とはならず, また持続性心房細動に対してアミオダロン投与下にカルディオバージョンを施行するも洞調律に復帰することはなかった。一方で, 本症例は心不全以外に脳梗塞, 静脈血栓症ならびに2型糖尿病を併存しており, polypharmacy の状態にあった。加えて, 大腸憩室出血による複数回の出血イベントと赤血球輸血歴を有していた。以上より, 本症例は心不全の病因の根治は不可能とし, 内服薬を減量・減薬しながら状態を安定化することとした。心不全管理ならびに梗塞と出血のいずれの観点からハイリスクな高齢者心房細動の一例を経験したので報告する。

## 31. 急速に胸腹水貯留が増悪した高齢発症 SLE の1例

有上周佑 (大森病院初期研修医)

小松史哉 (大森病院総合診療・救急医学講座)

食道癌術後の61歳女性。来院1ヵ月前から急速に胸腹水貯留が進行し, 発熱と呼吸困難が出現したため当院に救急搬送された。精査の結果, 高度蛋白尿と血球減少, 補体低下, 抗核抗体陽性, 抗 ds-DNA 抗体陽性を認め, 高齢発症 SLE の診断となった。また著名な低アルブミン血症を認め, アルブミンとフロセミドを使用しながらステロイドパルス施行されたが症状改善に乏しく, シクロホスファミド静注療法施行されて症状改善傾向となった。本症例における胸腹水貯留の原因としてネフローゼ症候群と漿膜炎が考えられた。ネフローゼ症候群の原因としては, 悪性腫瘍関連腎炎や感染症関連腎炎, ループス腎炎が考えられたが, 悪性腫瘍と感染症は否定的であった。ループス腎炎によるネフローゼ症候群が疑われたが, 全身状態不良のため腎生検は施行しなかった。本症例では3年前から持続性蛋白尿を指摘されていたが精査されていなかった。自覚症状に乏しくとも, 持続性蛋白尿を見たら精査を行う必要がある。

## S. 柴田洋子奨学助成金・柳瀬武司奨学基金受賞講演

### 32. 涙小管炎の成因について

岡島行伸, 堀 裕一 (眼科学講座)  
青木弘太郎, 石井良和, 館田一博 (微生物学教室)

涙小管炎は涙小管に結石を伴う感染症で慢性に持続する眼脂をときに角膜穿孔を引き起こす疾患である。原因菌として *Actinomyces* の存在が指摘されていたが嫌気性菌のため培養困難であり病原菌の特定は困難であった。今回我々は次世代シーケンズを用いたメタゲノム・ショットガンシーケンズ解析をもちいて遺伝子レベルで解析した。その結果、嫌気性菌 *Actinomyces* 属 15 属, *Propionibacterium* 属と *Parvimonas* 属が 11 属, *Prevotella* 属 9 属, *Fusobacterium* 属 6 属, *Selenomonas* 属 5 属, *Aggregatibacter* 3 属, 通性・好気性菌 *Streptococcus* 属 13 属, *Campylobacter* 属 6 属, *Haemophilus* 属 3 属が検出された。結石は嫌気性菌と通性好気性菌の混合感染であった。これらの検出菌はバイオフィルム形成が特徴である歯周病の原因菌と類似していた。今後涙小管炎予防や治療のヒントになるのではないかと期待される。

### 33. Optimizing the direction and order of the motion unveiled the ability of conventional monolayers of human induced pluripotent stem cell-derived cardiomyocytes to show frequency-dependent enhancement of contraction and relaxation motion

中瀬古 (泉) 寛子, 千葉浩輝, 後藤 愛, 布井啓雄  
神林隆一, 武井義則 (薬理学講座)  
松本明郎 (加齢薬理学講座)  
内藤篤彦 (生理学講座細胞生理学分野)  
杉山 篤 (薬理学講座, 加齢薬理学講座)

ヒト生体心臓は心拍数依存性に収縮力が増加する正の力-頻度関係 (陽性階段現象) を示すが, ヒト iPS 細胞由来心筋細胞は陰性階段現象を示すことが報告されてきた。今回, 同細胞の 2 次元細胞シートの電気機械的特性が, 電気刺激による運動方向制御や酸素供給増加を行うと改善されるという仮説をたて, 検証した。方法として同細胞シートの細胞外電位観測と電気刺激を多電極システムで, 細胞運動の運動ベクトル化をライブセルイメージングシステムで行い, 同時計測した。まず自発収縮では, 興奮伝導と収縮運動の開始および伝播の不一致を見出した。そこで電気刺激を行うと, 興奮伝導と収縮開始地点が一致し, 最大収縮速度が増加した。興味深いことに, 細胞シートの弛緩運

動の強い領域付近で電気刺激を行うと, 最大収縮速度がより増加した。さらに, 最大収縮速度は電気刺激頻度依存性に増加し, 酸素供給の増加はこの現象を強化した。以上より同細胞シートは, 電氣的興奮, 収縮および弛緩が同じ領域から始まるよう電気刺激を行うと, 生理的な陽性階段現象を示すことを明らかにした。

## T. プロジェクト研究報告

### 34. レヴィ小体病における唾液腺 MIBG 集積の検討

蝦名潤哉, 洪川茉莉, 長澤潤平, 柳橋 優, 平山剛久  
川辺清一, 狩野 修 (東邦大学医学部内科学講座  
神経内科学分野)  
水村 直 (東邦大学医学部放射線医学講座)  
石井亘友 (東邦大学医療センター大森病院  
中央放射線部 PET・RI 室)  
小林幸男 (公立学校共済組合関東中央病院核医学検査室)  
織茂智之 (上用賀世田谷通りクリニック/  
公立学校共済組合関東中央病院脳神経内科)

MIBG シンチグラフィ検査はパーキンソン病 (PD) を中心とするレヴィ小体病 (LBD) の補助診断に有用で, 病理学的レヴィ小体好発部位である大唾液腺でも集積低下する可能性が近年示唆されている。本研究は顎下腺と耳下腺における MIBG 集積を LBD 群と対照群 (NPC) 間で比較し, 臨床症状との関連を評価した。LBD 60 例と NPC 40 例で検討し, プラナー画像は胸部と頭頸部の早期像と後期像を撮像した。LBD 群の顎下腺 MIBG 集積は有意に低下し (早期像:  $p=0.014$ , 後期像:  $p=0.032$ ), 心臓集積も有意に低下していた (早期像:  $p<0.01$ , 後期像:  $p<0.01$ )。一方, 耳下腺で有意差が認められなかった。MIBG 集積は大唾液腺と心臓間, 運動症状と唾液腺・心臓間で相関が認められなかった。LBD では顎下腺 MIBG 集積が低下し, ドパミン神経系と大唾液腺・心臓交感神経変性は独立して進展する可能性が示唆された。

### 35. EGFR exon19 欠失変異陽性非小細胞肺癌のサブタイプ別の治療効果に関する後方視的検討

吉澤孝浩 (東邦大学医学部内科学講座  
呼吸器内科学分野 (大森))  
大塚 創 (東邦大学医学部内科学講座  
呼吸器外科学分野 (大森))

[背景] EGFR exon19 欠失変異 (ex19del) は EGFR 陽性肺癌の主要な遺伝子変異であるが, サブタイプ別の治療効果の違いについては不明な点が多い。[目的] ex19del のサ

ブタイプ別の治療効果を明らかにする。[対象と方法] 当院で診断したex19del陽性非小細胞肺癌26例のサブタイプを解析しEGFR-TKIの治療効果を検討した。[結果] 臨床背景は年齢中央値65.5歳，男/女：10/16例，組織型：腺癌/扁平上皮癌：25/1例，喫煙歴あり/なし：13/13例であった。全体での奏効率は80.0%，PFS中央値は22.4ヶ月，OS中央値は55.9ヶ月であった。欠失の先頭部位でE746とL747を比較すると，奏効率は75.0% vs 85.7% (p=0.612)，PFS中央値は16.3ヶ月 vs 24.1ヶ月 (p=0.658)であった。[結論] ex19delのサブタイプによって治療効果に差がある可能性が示唆された。

## U. 一般演題

### 36. 外傷性椎骨動脈損傷に対する治療経験

松崎 遼，中田知恵，近藤康介，三海正隆，栄山雄紀  
 瀧之上裕，小此木信一，寺園 明，原田直幸，周郷延雄  
 (東邦大学医学部医学科脳神経外科学講座 (大森))  
 内野 圭(東邦大学医学部医学科脳神経外科学講座(佐倉))

鈍の外傷性椎骨動脈損傷はまれだが，二次的脳梗塞を起こして急速に予後を悪化させる。われわれは，重篤な脳梗塞を発症する前に診断し得た鈍の外傷性椎骨動脈損傷4例を経験し，コイル塞栓術によって良好な経過をたどったので報告する。4例は全例男性で，年齢は45歳～71歳(平均57歳)，受傷機転は交通外傷2例，転落2例であった。初診時GCSは肺挫傷に伴う低酸素脳症1例の11点以外は15点であった。椎骨動脈は全例完全閉塞(Denver grade IV)であった。1例のみ治療前に軽度の右小脳半球脳梗塞をきたしたが，3例は無症候であった。全例に対してコイル塞栓術が施行され(0日2例，7日1例，17日1例)，術後合併症はなく経過良好であった。鈍的頸部外傷には椎骨動脈損傷が併発することを念頭に置き，早期に神経放射線学的画像検索を行うべきである。コイル塞栓術は鈍的外傷性椎骨動脈損傷に有効で安全な治療であると考えられた。

### 37. 高度感染条件下のSARS-CoV-2感染における耐糖能別リスク評価

齋藤 学，内野 泰，森岡紘子，岩田葉子，小島原佑紀  
 佐藤源記，吉川美久美，宮城匡彦，弘世貴久(東邦大学  
 医学部内科学講座糖尿病・代謝・内分泌学分野大森)

【目的】耐糖能の違いがCOVID-19の感染成立の寄与因子となるのか検討する。【対象および方法】本邦にて個人用保護具(Full-PPE)対応前の2020年2月から5月に「濃厚接触者」国内認定を受け，SARS-CoV-2/PCR検査を受けた

症例を非糖尿病患者(A1c $\leq$ 5.6%)，前糖尿病患者(A1c 5.7～6.4%)，糖尿病患者(A1c $\geq$ 6.5%)の3群に分類。F0に対し同居又は行動環境を共有した症例をF1とした。非Full-PPE対応のF1にも拘らず，COVID-19の感染が成立しなかった症例を後ろ向きに検討した。【結果】対象者数54例。PCR陽性者は43例，年齢54 $\pm$ 17.8歳，BMI 23.8 $\pm$ 4.5 kg/m<sup>2</sup>，A1c 6.32 $\pm$ 1.53%。陰性者は11例，年齢54.2 $\pm$ 15.4歳，BMI 20.4 $\pm$ 3.6 kg/m<sup>2</sup>，A1c 5.78 $\pm$ 0.41%であった。PCR陽性率に関し非糖尿病患者と前糖尿病患者，糖尿病患者にて有意差を認めなかった。既知のCOVID-19重症化因子，BMI，A1c，年齢とPCR陽性率に関してロジスティック解析分析を行い，BMIのみが独立した危険因子であった。【総括】肥満度はSARS-Cov-2高度感染条件において独立した危険因子であった。

## V. 分科会報告

### 38. ICUにおける早期離床リハビリテーションの取り組み

下山渉太，川崎真宏，貫井勇介(東邦大学医療センター  
 大橋病院リハビリテーション部)  
 牧 裕一，小竹良文(東邦大学医療センター大橋病院  
 麻酔科)  
 武者芳朗(東邦大学医療センター大橋病院  
 リハビリテーション科)

近年，集中治療の発展により，ICUにおける重症患者の生存率は劇的に改善している。一方で，ICU退出後の身体機能障害，認知機能低下が問題視され，早期離床・リハビリテーションの重要性が指摘される。さらに高齢社会となった本邦では集中治療を要する患者の年齢層も高まりつつある。高齢者は身体的・認知的脆弱性だけでなく，臓器機能の低下を伴う。潜在能力(予備力)の低下から侵襲や安静による弊害が顕在化しやすく，リハビリテーション介入は早期から適切に行うことが望ましい。本邦では，2018年度から特定集中治療室管理料に「早期離床・リハビリテーション加算」が新設され，当院においてもリハビリテーションプロトコルを整備し，算定を開始している。今回，ICUにおける早期離床リハビリテーションの経験と実績を報告する。

### 39. 透析患者におけるNT-pro BNPとQOLの関係

山崎恵介，高橋 禎，吉田規人，石井信伍，日高 舞  
 大橋 靖(東邦大学医療センター佐倉病院腎臓学講座)

【目的】慢性維持血液透析患者におけるQOL維持向上は

喫緊の課題であり，心不全の重症度は患者 QOL に関係しうる．今回我々は患者 QOL と NT-proBNP の関係について調査した．【方法】2019-2022 年に体組成検査を行った慢性維持血液透析患者 336 名を透析前 NT-proBNP の 4 分位数で群別化し，各臨床データおよび体組成検査と比較し，KDQOL-SF を用いアンケート調査を行った．【結果】NT-proBNP 値と透析歴，CRP，ECW/ICW 比は正の相関を示

し，CRP は負の相関を示した．NT-proBNP 値高値群 [Q4 群 (n=74)  $\geq 9,300$  pg/ml] は健康関連 QOL 全項目が高度に低下していた．【考察】維持透析環境では栄養障害および慢性炎症は細胞内外の水分バランス異常をきたし，心負荷を増悪する可能性がある．NT-proBNP 上昇は全体的な健康観を損い，患者 QOL を低下させる．